盲僧習俗と地域文化
-ハンディキャップをもつ人々への崇敬-

小口千明（筑波大学大学院人文社会科学研究科）

I はじめに

今日の日本では福祉という考え方が広く浸透し、ハンディキャップをもつ人々との共生が進めつつある。これは高く評価すべきことがからであり、今後ともいっそうの推進が期待される命題であろう。

しかし、地理学という学問分野に焦点を当てて考えた場合、この動向をどのように受容し、あるいはこの動向の推進に向けて、どのように貢献すればよいのであろうか。福祉の分野において、地理学はさほど顕著な研究上の積みをもたないように見受けられる。

地理学研究と福祉の関わりにおいて、例えば、福祉施設の配置や分布といったテーマが想起される。しかし、これらは工場の分布や商業施設の分布といった定評ある研究手法を福祉施設に置き換えただけのことであり、地理学独自の視点というほどの新進な一般とは言えない。地理学は人間と自然、あるいは社会との関わりを考察する学問として発達した歴史をもつが、人間を取り巻く自然や地域の側への関心に比べ、人間の側への関心はさほど強くなかったといえる。そのため、地理学として独自の人間観はあまり発達しているとはいえない状況にあり、そのことが、福祉といったテーマに地理学が十分に対応しにくい状況となって表れていると考えられる。

日本では1970年代以降に顕著となる、環境認識論をふまえた地理学研究11の本質は、環境に対する認識主体の多様性を問題提起したものである。表現を換えるならば、「その人の立場に立った環境像」が問題となる。多くの場合、地理学では「その人の立場に対して、ごく平均的かつ等質的な人間像を当てはめてきた。すなわち、多くの地理学研究では、そのような平均的かつ等質的な人間像を行動の主体として論を展開することで「こと足りり」としてきた。このような動向が、ハンディキャップをもつ人々に対する地理学研究の積みの少なさとなって表れていると筆者は考えている。

環境に対する認識主体の多様性を追究する場合、年齢・性別・居住地による差異など、統計でしばしば採りあげられる項目によって人間の属性を細区分する研究もあり、それらにも一定の意義がある。しかしながら、一般的な統計では区別されにくい人間の属性も、実際の人間生活においては重要な差異となるであろう。ハンディキャップをもっていたり、あるいは傷病により本人の日頃のコンディションとは異なる状況下にある人々という存在は、一般的な統計項目としてはデータが得にくく、地理学の研究対象としてはとらえにくいが、現実世界においては、ごく日常的な存在といえよう。そのため、筆者は、人間のこのような属性に対しても地理学研究が目を向けるべきであろうと考えている。

ところで、ハンディキャップをもつ人々を対象にして今日推進されている施策をみると、施策自体は意義深いが、時として、健常者がハンディキャップをもつ人々に対して手を差し伸べるべきかという疑問が見受けられる場合がある。車椅子が通行しやすいように段差をなくしてスロープを設置したり、歩道に点字ブロックを設置する施策自体は有意義であるが、これらの施策を「やめてあげる」と考えた場合、ハンディキャップをもつ人々からの理解は得られないであろう。同様に、ハンディキャップをもつ人々に対して「同情する」などということは、人間としての本質的理解が不十分な行為であると考えられる。すべての人々が対等である以上、たとえ施策自体は有効であっても、「同情」などという心情から行われたのでは正しい理解とは言えないであろう。

それそのもの、人権教育が普及し、共生が叫ばれる今日ではハンディキャップをもつ人々への理解が深まり、過去においては理解が不十分であったといえるであろう。この問題を考えるうえで着目されるのが、盲僧習俗である。盲僧（写真1）の活動は今日も継続しているが、かつては今日以上に盲僧の人数が多く、活動
写真1 盲僧を案内する晴眼僧 —平成21(2009)年—

写真2 妙音十二楽における琵琶弾奏 —平成21(2009)年—

写真3 常楽院旧跡における妙音十二楽法要 —平成21(2009)年—

も各地で活発であった。人々と盲僧との関わりをみると、盲僧に対する人々の崇敬の念が認められる。また、盲僧の活動は、ハンディキャップをもつ人々の積極的な社会参加の姿といえる可能性がある。

盲僧とは、盲人の僧侶である。僧侶として仏教上の修行を積んでいるが、視覚に関してはハンディキャップをもっている。この盲僧の活動や人々との関わりを検討することによって、近年の人権教育の成果とは異なるかたちでのハンディキャップをもつ人々とそれを取り巻く人々の共生関係が明らかになる可能性がある。すなわち、盲僧が人々の暮らしの中でどのように位置づけられるかを検討することによって、日本の伝統文化の中ではくまれた共生の思想を明らかにすることができるのではないか。日本の伝統文化の中に深むべき考え方が認められるとすれば、そこには地域的な特質の有無が問題となる。ある地域に共生の考え方が深く根付いているとすれば、それはなぜなのか。この問いかけが、すなわち、人間観を対象とした地理学研究が成立する基盤である。

このような重要な課題はたもとから解明できるわけではないが、本稿はその解明に必要となる事実関係を示し、今後、日本の伝統文化の中に見出される共生思想の特質を明らかにするための一つのステップとしたい。

Ⅱ 盲僧の活動

現在、盲僧はどこに何人もいるか。この問いに応えるべき統計や帳簿は管見の限り存在せず、残念ながら答えはわからない。しかしながら、盲僧の活動として広く知られた行事があり、この活動への着目は、盲僧の実情を知る重要な余裕となる。その活動が、年に一度、鹿児島県日置市中島の常楽院旧跡で開催される、「妙音十二楽とよばれる琵琶弾奏をも含む法要である（写真2）。天台宗寺院である日置市中島の常楽院は、建久7（1196）年に宝山桟校により建立されたとの伝承をもつ。常楽院はその後移転するが、日置市中島は常楽院の旧地であり、宝山桟校ほかの墓所がある。宝山桟校は島津氏の支持を得て、その後、各地の盲僧を統括した。この宝山桟校をはじめとする先人の供養を行う常楽院の法要は、かつては多くの盲僧が集まった。

妙音十二楽は、導師による説経に続いて、琵琶を中心に笛、太鼓、法螺（大小）、木魚、手拍子などにより旋律を奏で（写真3）、仏教音楽の一種である。平成21（2009）年10月に行われた妙音十二楽法要を筆者が実現したところ、盲僧が担当する楽器は琵琶と笛であった。当日、12人の僧が出仕者をつとめて妙音十二楽を奉じられたが、盲僧は4人で、他は晴眼僧が担当していた。これは、盲僧の数が近年減少したことによるもので、第二次大戦前には100人以上の盲僧が妙音十二楽に関わったとの伝承がある。
お、平成22（2010）年10月の妙音十二楽法要においては、9人の僧が出席者をつとめ、盲僧は2人となった。
盲僧が弾奏する琵琶は独特の音色であり、先述した平成21年の妙音十二楽法要においては、地域住民をはじめ約70人の聴衆が琵琶の旋律に耳を傾けた（写真4）。この聴衆の中には報道関係者や自治体の文化行政担当者なども一部含まれていたが、大半は琵琶弾奏の聴講者であった。琵琶弾奏は、第一義としては先人供養のために行われるが、日置市周辺の地域住民には、その弾奏を心待ちにしている人があることに注意する必要がある。

楽器としての琵琶弾奏は盲僧に限られるものではなく、聴覚者による琵琶弾奏も行われている。しかし、琵琶と盲僧とは、深く関わりがあり、琵琶流派の一つである藤原琵琶は、日置市中島常楽院の琵琶がその祖とされている。他方、琵琶には筑前琵琶という流れもあり、筑前琵琶は福岡県福岡市に位置する天台宗成就院との関わりが深い（写真5）。成就院は、現在は40か寺を統括する寺院であるが、かつてはより多くの末寺を統括する寺院であった。末寺のすべてが盲僧寺院であるか否かは不明であるが、盲僧寺院を含め、544の末寺が存在したとの説がある。このことからみて、薩摩琵琶は地域に位置する常楽院（現、日置市）と筑前琵琶は地域に位置する成就院（現、福岡市）が九州地方における琵琶弾奏の重要地点であり、それと同時期に盲僧の拠点的性格をもつ寺院と考えることができよう。ただし、筑前琵琶の発展過程と成就院との関わりは慎重に検討する必要がある。

常楽院で挙行される妙音十二楽法要において出仕者のつくる僧は、居住地をみると、平成21年の場合、鹿児島県伊佐市3人、日置市2人、鹿児島市1人、さつま町1人、曾於市1人、宮崎県都城市2人、延岡市2人、日南市1人となっている。妙音十二楽法要が開催される日程市から100km以上離れた地域に居住する僧も含まれており、鹿児島・宮崎県域、宮崎・大隅・日向国が常楽院の出仕者圏になっている。平成22（2010）年の場合には、出仕者の居住地は、鹿児島県伊佐市2人、日置市1人、鹿児島市1人、さつま町1人、宮崎県都城市2人、延岡市1人、日南市1人である。平成21年から同22年において出仕者となる僧の数の統計は減少したが、出仕者が分布する圏域に大きな変化はない。なお、この圏域は鹿児島・宮崎の2県にまたがり広域とみることができるが、熊本・大分県以北は奄美以南に及んでいない点に注意する必要がある。

常楽院の出仕者となる僧は、現在では聴覚者が多数を占めるが、それぞれの僧のほとんどは、先代あるいは先々代が盲僧であった。聴覚僧で、在家から出家した僧は、むしろ少ない。これらの状況からみて、現在における常楽院の出仕者圏は、かつて常楽院の統轄下にあった盲僧の分布圏域を示している可能性が強い。

年に1回、妙音十二楽法要において出仕者となる盲僧あるいは聴覚僧は、日常的には居住地付近で宗教活動を行っている。宗教活動の具体像については後述するが、常楽院における妙音十二楽法要の出仕者圏は単に常楽院と各地に居住する盲僧・聴覚僧との結びつきを示すのではなく、その内部が盲僧や聴覚僧の宗教活動で充填されている領域である。聴覚僧の多くは先代、先々代が盲僧であったことから、この領域は今日あるいは先代、先々代の時期まで盲僧習慣の残存地域であるということができる。

福岡市の成就院は、かつて盲僧寺院を統轄した歴史
をもつが、今日では盲僧との関わりは少なくなっている。また、配下の寺院においても、盲僧は過去に存在していたが廃廃されている。常楽院と成仏院の中間の位置する熊本・大分県域の琵琶弾奏について、今後、情報を収集する必要があるが、現段階で盲僧の歴史が残存地域を示すとすれば、上述したように、常楽院では妙音十一楽法要の出仕者風層がそれに当たると言える。なお、この領域を何らかの政治的あるいは行政的「すみわけ」の所産とみなしきる可能性があるが、詳細な検討のためにはデータをふやす必要がある。

### 三 日常的宗教活動にみる盲僧と地域住民との関わり

常楽院配下の盲僧および盲僧寺院の業務は、寺僧関係にあって用いられる管理、弁論の供養などを行なう僧価とは宗教活動の内容がかなり異なる。盲僧の主たる宗教活動は、日後の供養というよりも、日常的な廻欄と、喜神を定めて行う祈福である。廻欄は、受け持ちとなる集落内の家々を訪ねて浄めを行い、経を唱える。御幣を供える場合もある。鹿児島県さつま町に位置する薩摩観音寺（写真6）の盲僧、松山隆喜師を例に具体的に説明すると、さつま町求名の橋掛、狩宿、さつま町中津川、薩摩川内市松谷寺町黒木を範囲として廻欄を行う。また、2月には星祭、11月から12月にかけては地神祭（ジガミサマ）を行う。星祭や地神祭は、生まれ年の星巡りなどをもとにした祈福である。これら一連の儀式は、仏教というよりも道教との関わりが指摘されている。このほか、時季、祈福やお祓いを受け付けている。

廻欄において琵琶弾奏を行う盲僧もあるが、薩摩観音寺では、昭和40年代後半以降は琵琶弾奏を取りやめ、これは、当時は古くから琵琶弾奏を行うしきたりの家と行わない家とが定められており、時代の流れとともに、そのことに対する住民からの不平や不満が出始めた。そこで、松山師により平等化が図られ、統一的対応としたものである。

廻欄の対象となるさつま町求名および薩摩川内市松谷寺は、ともに川崎地域で、集落は点在している（図1、写真7）。松山師が廻欄を始めた昭和20年代後半において、まだ自家用車の普及は進んでおらず、鉄道（国鉄宮之電鉄）やバスなど公共交通機関を乗り継いで廻欄を行った。松山師は盲僧の杖をたどり一人で精力的に山野を歩き、廻欄を行った。

この廻欄に際し、盲僧である松山師の行動がとても円滑になる仕組みがあった。それが、泊り宿（やど）の存在である。泊り宿は「宿元（やどもと）」ともよられ、廻欄中の盲僧のある定まった民家に泊まって、安全かつ効率よく廻欄を続け続ける仕組みである。盲僧は、泊り宿に対してとくに代金を支払うことはなく、宿泊をはじめ、食事や食具の提供を受けた。これは松山師が住民に依頼して始まった風習ではなく、松山師が廻欄にとずさわる以前、すなわち、松山師の先代が廻欄を行った時代以前から存在していた。

具体的には、さつま町求名の橋掛集落に1軒、求名の狩宿集落に1軒、さつま町中津川に1軒、薩摩川内市松谷寺町黒木に4軒の泊り宿が存在した（写真8）。泊り宿の風習はさつま町付近に限られるものではない。宮崎県延岡市浄福寺の盲僧、永田法順師の廻欄地域においても存在が認められる。泊り宿の起源は未解明であるが、近年の人権教育の影響を受けたものではなく、盲僧習俗が存在する地域において維持されてきた地域文化の一例と言えることができる。

泊り宿は、誰でもが「サービス」を提供できる仕組みではなく、特定の家がその任にあたるという方法で維持されてきた。ある集落において、いかなる家が盲僧の泊り宿として選ばれているかはさらに検討が必要であるが、少なくとも、同情に親しみ、一時的な感情に依拠する仕組みではないことは明らかである。盲僧の廻欄を支える泊り宿の風習は、地域文化として根付いている独自の実像として位置づけることができるであろう。

昭和20年代から30年代にかけて活発に利用された松山師の泊り宿は、昭和40年代以降になって利用されなくなっていてゆく。これは、松山師が結婚し、夫人が自動
車運転免許を取得するとともに、廃棄に自家用車を利用することになったからである。松山師の場合には、昭和40年代ということで自家用車の導入が当地域としては早めであり、泊り宿の仕組みが早い時期に不要となったが、永田師の場合にはごく最近まで泊り宿が活用された。泊り宿という風習の消減や残存には、このように盲僧側の事情が関係している。しかし、泊り宿の消減は、泊り宿を提供する地域住民側からの拒絶や、放棄でないことに注意すべきである。盲僧が宿泊したとしても、地域住民側がそれを断ったのであれば、地域住民による盲僧への崇敬が失われた証拠となるであろう。残実に発生した事象はその逆であるから、盲僧に対する地域住民の崇敬は維持されていることを読み取るべきであろう。

かつては盲僧に対する評価が今日以上に高かかったとみられる。盲僧寺院の中には盲人でなければ後継できず、晴眼者では後継の資格が得られなかった例が報告されている。しかししながら、近年は、盲僧の人数が減少している。現に、かつては盲僧によって成立していた妙音十二楽法要は、今日では大半の演奏・演奏者が晴眼僧になっている。盲僧減少の要因としては医療の発達が関係していると考えられるし、盲学校教育の浸
透や実質的に関係しているものと推察される。それであれば、盲僧行者の動向は、後の所続く可能性が大きい。共生の在り方を示す伝統文化であり、地域文化である盲僧習俗についても研究すべきである、その推進は急を要している。

IV おわりに

本稿は地理学における人間観の深化を意図し、人権教育の表面化的理解ではなく、地域を根付いた共生の在り方を模索する意味で、ハンディキャップをもつ人々の社会参加という命題に対して地理学からいかなる知見が導けるかを試みたものである。具体的には、主として九州地方を舞台として展開する盲僧の活動と、地域住民がそれを支える仕組みについて検討した。
その結果、判明したことを掲げる。

1. 日本には盲僧の存在がある。盲僧は、決して単に視覚においてハンディキャップをもつ仏教僧という存在ではなく、琵琶演奏をはじめとする独自の技能を身につけ、崇敬を集める存在である。

2. 九州北部には福岡県福岡市の成立院、九州南部には鹿児島県日置市の旧常楽院という、少なくとも2地点の盲僧の拠点が認められる。ただし、これらの拠点性は歴史的な推移を含めての位置づけである。

3. 妙音十二楽法要における出仕者の居住地からみると、旧常楽院を核とする盲僧の活動地域は、ほぼ鹿児島・宮崎両県域である。

4. 妙音十二楽法要の出仕者が、日常的に居住地周辺で宗教活動を行っている事実からみて、妙音十二楽法要の出仕者域域は盲僧習俗地域ということができる。

5. 盲僧習俗地域の盲僧の隠営を支えるための「泊り宿」が成立し、維持されてきた。これは、共生を指向する地域文化の好例ということができる。

6. 今日では泊り宿に関わる習俗の消減がみられるが、これは盲僧側の事情によるところが大きく、盲僧への崇敬が失われたわけではない。

7. 以上を通け、少なくとも九州地方の一部にはハンディキャップをもつ人々の積極的な社会参加を促進させ、共生するための地域文化が存在する。ハンディキャップをもつ人々との共生を实现させる地域文化は、なぜ九州で発達したのか。九州以外の地域では、共生に関わるどのような地域文化が存在するのか。これらは、地理学が人間観を深化するために取りかからなくてはならない重要な課題である。

付記

本研究を進めるにあたり、一音寺住職栗山光人師、藤原容音寺住職松山隆彦師、成就院住職緑谷隆幸師、浄満寺住職戸井法順師（当時）、薩摩川内市祁介院支所、日置市教育委員会、延岡市教育委員会、岩見西日本文化協会ならびに鹿児島県薩摩川内市、さつま町、日置市、宮崎県都城市、延岡市の住民の方々にたいへんお世話になり、多くのご教示をいただいた。記して、厚く御礼を申し上げる次第である。

注および文献

1）朝地利夫（1977）：『歴史地理学方法論』大明堂。
2）卯田耕雲（1990）：『統続大観沿革史』常楽院事務所、p. 123。
3）一音寺、栗山光人師による。
4）福岡日日新聞（初1924、復1933）：『九州盲僧の総本山』、中野徹能編『盲僧歴史民俗学論集 2』、名著出版、p. 365、所収。
5）野村翼子（2006）：『伝承文学資料集成第20輯 幽玄・琵琶語り集』、三弥井書店。よれば、熊本県において盲僧を集結する寺院の存在は頗著とはいええない。
6）中野徹能（1993）：『序にかかえて』、中野徹能編『盲僧歴史民俗学論集 2』、名著出版、p. 8、所収。
7）高松敬吉（2003）：『盲僧寺院の系譜－宮崎県西部市立野寺総集の地歴寺総集－』、福田晃・山下寛一編『武楽・盲僧の伝承世界 第2集』、三弥井書店、p. 294、所収。